Nice Face

顔語り

早坂 竜太

はやさかりゅうた　株式会社古川土地 代表取締役社長

1967年宮城県古川市（現大崎市古川）生まれ。1985年、宮城県古川工業高等学校卒業後、株式会社古川土地に入社。2002年8月、代表取締役社長に就任。2018年、宮城大学大学院事業構想学研究科博士前期課程修了。おおさき未来エネルギー（株）代表取締役副社長、（一社）みやぎ大崎観光公社副代表理事、宮城野部屋おおさきファンクラブ副会長、ほか役職多数。

JR古川駅前の通りを歩くと、ビルに掲げられた懸垂幕が迎えてくれる。全国高等学校野球選手権大会が終わったばかりのこの日は、「祝 仙台育英高校夏の甲子園二年連続決勝」。その時々のトピックに合わせ、祝賀や応援、感謝などのメッセージが掲げられる。いずれも、前向きになれる内容ばかりだ。ビルの持ち主（株）古川土地の代表取締役社長を務める早坂竜太さんが、地域を盛り上げる一助になればと発案し、もう15年以上続けている。

「人が大好き。大崎が大好き」と屈託なく笑う。人と人、人と想い、想いと想いをつないで、大崎の未来を明るく輝くものにしたいと願う。自分を育ててくれた故郷への恩返しのために。

早坂さんは古川市（現大崎市古川）で生まれ育った。「6畳2間の市営住宅に、祖父母、両親、姉と妹7人で住んでいました。裕福ではなかったけど、あったかかった。あれが私の原点です」。祖母は食物の端材で煮物などを作り、近隣の農家から野菜を売りにくるおばちゃんたちに振る舞った。祖父が廃材で手作りした椅子やテーブルを置いた小さな庭は、にぎやかな交流の場となっていた。中学の頃、払い下げになった市営住宅を父親が買い取って建て替え、正真正銘のマイホームとなった。大切な思い出がたくさん詰まった実家である。

中学卒業後は古川工業高校に進学。建築学科を選んだのは、「両親に大きな家を建ててあげたかった。あと、祖父の影響もあって物作りが好きだったんですね」。父親が2度脳梗塞で倒れたこともあり、恩師の力添えをもらい、地元企業に就職した。それが、古川土地である。

それまで学んできた建築という括りを超えて、家を持つために必要な手続きや土地の売買など、さまざまなことを学び体験する。「他人様が思い描いてきた夢を形にできる、素晴らしい仕事だと思いました」。高校時代にアルバイト先などでご縁ができた人たちが、「竜太くんがいるなら相談しやすいから」と顧客になってくれたことは、とてもありがたかったと振り返る。

早坂さんがモットーとしているのは「見逃しの三振より、空振りの三振」。失敗を恐れず、まずはチャレンジ！である。自身もつねに実践してきた。

35歳で代表取締役社長に就任してから、それまで会社がやってこなかった事業にも果敢に取り組んだ。建設と不動産のノウハウを融合した事業や、共同企業体による提案・受託など官民一体となった地域づくりに力を尽くしている。長年にわたり地域の懸案となっていた廃ホテルを、難交渉の末に取得、解体・建設を担い、災害公営住宅として再生したことは大きな話題となった。

「未来への負の遺産とならずにすんでよかった」と、安堵の表情を見せる早坂さんは、地域の将来を見据え、次世代の育成にも力を注いでいる。その一環として、地域の事業所の協力を得て、古川工業高校建築科の生徒向けのインターンシップ（現場実習）を20年近く実施してきた。

古川土地は不動産事業部においても、賃貸物件の管理件数や仲介契約件数が地域ナンバーワンという実績を有する。多岐にわたる事業を手がけ、自治体や住民からの信頼も厚い。

そんな企業を牽引しながら早坂さんは、両親の介護のため姉と妹と協力し合い、月の半分以上は実家に泊まり込む生活を12年間続けた。さらに愛娘の思いがけない難病との闘いが今も続いている。順風満帆とは言い難い日々もあったが、どんなときも底抜けに明るい笑顔は曇ることがなかった。

座右の銘は、敬愛する哲学者で思想家の安岡正篤の「一燈照隅 万燈照国」。一隅を照らす光が集まれば、その光は国全体をも照らすこととなる。まずは自らが発光体となって地域のためにできることを、と、労を惜しまず尽くす早坂さん。その成果は、間違いなく万燈となって、大崎市の未来を明るく照らすことだろう。

インタビュー・構成／編集部
撮影／大沼英樹